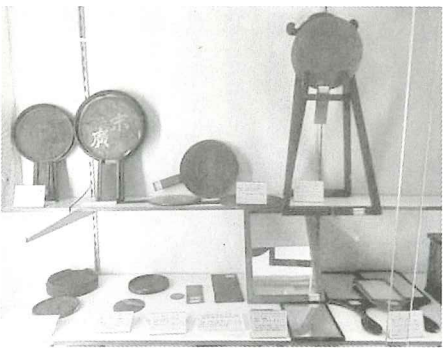


## 郷土館発

### 鏡

邪馬台国の女王・卑弥呼が中国から授かったという説がある三角縁神獸鏡さんかくのりじんぶつかがみ、全国各地で見つかつているようです。近いところでは豊田市の百々古墳からも出土しています。

鏡は神聖なもので、郡内の神社にも神宝として祀られているものがいくつもあります。



様々な鏡

ガラスの加工技術が発達し、水銀のアマルガムを塗るという技術が明治期に導入されると、一般の家庭で鏡が用いられるようになりました。それ以前のは青銅や白銅などの金属を磨いたものでした。これは、研ぎ師が何年か一度巡回してきて磨かなければ、像が薄れてしまいます。きちんと蓋をしたり、

ケースに入れたりして鏡面を守ってきました。こうして大切に使われてきた金属性のものには、鏡掛けにかけて使う大型のもの、懐に入れて持ち歩くもの、又、丸いものや四角いものなど様々な用途、形状のものがあります。



スミ川口出土の丸鏡

土中から発掘された鏡が、民俗のコーナーにあります。東納庫スミ川口の畑から出たもので、鶴らしき鳥や松の木が描かれた絵柄が施されています。これは生活に使われていたものなのですが、はつきりとはわかりません。いつごろのものかもわかりません。

郷土館の展示物に、生活用品として使用されていた鏡の外に、おそらく神事に関係していたであろうという鏡があります。

日本武尊を祭神とする大名倉の白鳥神社は、建久元年(一一九〇)、作手村白鳥から「白鳥大明神」を後沢地内に分社したのが始まりといえます。郡内屈指の古社で、江戸幕府から社領として

朱印五石が寄せられていました。郡内の朱印社は当社と津具八幡(二石)の二社のみですから、格の高い神社といえます。天明三年(一七八三)に火災に遭い、明治元年(一八六八)、御堂祠の旧阿弥陀堂に移し、皇大神宮を合祀して社名を「神明神社」と改めました。これも本年、ダム関連工事のため寒狭川対岸の高台への移転が行われました。

焼けてしまった白鳥大明神社の跡から和鏡が出土しました。郷土館の歴史のコーナーにある「水辺蘆双雀鏡みづべあしやまじやうかぎ」です。

これは平安末期、もしくは鎌倉初期のものといわれていますが、火災のために焼損がひどく、模様がようやくわかる程度で、鏡面は光を跳ね返すことはありません。よく見ると川の流れるらしい模様と、芦の葉らしい模様が描かれているのがわかります。(本文中の年代等は「設楽町誌・村落誌編による」)

(奥三河郷土館

館長 平松 博久)



水辺蘆双雀鏡